

## 10 高次脳機能障害者に対する家族支援

### ― 家族学習会の実践報告とその課題 ―

病院 家族支援小委員会

\*君嶋 伸明 (言語聴覚士)、四ノ宮 美恵子 (心理療法士)、森 曜子 (MSW)  
堺本 麻紀 (作業療法士)、廣田 早苗 (2F・看護師)、神園 尚子 (3F/看護師)  
金子 育代 (4F・看護師)、岩田 生湖 (5F・看護師)

#### 【はじめに】

高次脳機能障害者の家族は、患者本人の心身両面にわたる支援者としての役割が期待されながらも、さまざまな症状に対する対応策の戸惑いによる不安感や、患者本人の人格変化に対する戸惑い、家族関係の変化などの困難さを抱え、長期にわたり心理的な葛藤やストレスにさらされている状態にある。

こうした実態を踏まえて、家族支援小委員会は、高次脳機能障害者の家族にとって、支援の出発点となり、円滑な在宅生活を送れる目的で、必要な情報提供や、それぞれの家族間での意見交換できる共有の場として重要な役割を果たすと考える。家族支援を行っていくには、チームアプローチによる家族支援システムの構築が課題である。この点を踏まえて、家族学習会に、心理的な視点から見直しを図り、プログラム化を行い、リハビリテーションチームとして実践を積み重ねてきた。

本稿では、この家族学習会の実践経過を報告するとともに、今後の課題について考察する。

#### 【家族学習会の概要と経過】

2001年度より高次脳機能障害支援モデル事業として開始された。本年度開催は、医師による「高次脳機能障害とは」、MSWによる「社会資源の利用について」の講義形式と、グループ討議による家族学習を毎月1回交互に開催している。グループ討議に関しては、問題の捉え方や葛藤のあり方に相違がみられると推測し「親グループ」と「配偶者グループ」に分ける。

#### 【結果】

毎回のアンケート結果より「大いにそう思う」「そう思う」という意見回答が得られた。開催は有意義であり、このような機会を必要としていることが窺われた。と同時に、スタッフ側からの情報伝達に加え、同じ境遇である家族同士の情報交換の意義も多く窺うことができた。

#### 【考察・今後の検討】

書籍やインターネットでの情報収集は容易になっているが、それらの得た知識を基盤に、同じような境遇にある家族との情報交換・意見交換の場を持つことで、よりよい支援が可能となりえると推測する。そのためにも、携わるスタッフの一層のスキルアップと、グループ編成時にグループ構成員の等質性を図ることの限界からくる、不安感や違和感を指摘する意見もあることから、さらなるプログラムの修正やグループ編成には配慮が必要不可欠であり、家族学集会の長期的な効果を検証しつつ、家族支援のあり方について提言することが今後の課題である。